

「不敬虔な者でも救われる」  
ローマ人への手紙 4章5節

聖書によれば、神様は私たちに何かを要求しておられるのではなく、私たちに何かをお与えになろうとしていることがわかります。イエス様はこう言われました。「わたしが来たのは、仕えられるためではなく、仕えるためです」。信じられないかもしれませんが、神様は私たちが従わせようとしているのではなく、私たちが救おうとされているのです。

## 1 不敬虔な者を義と認めてくださる神。

まず、「不敬虔な者を義と認めてくださる神」ということばに注目してください。

### (1) 神。

聖書で言う神とは、天地万物が存在しない前から、永遠に存在されたのです。そしてその神が天地を造られたので、万物と私たちが存在するようになりました。

そして、その神は、父なる神、子なる神、聖霊なる神として存在しておられたというのが、聖書の教えです。

**適用：**天地万物をお造りになった神様は、父、子、聖霊の神として永遠に存在しておられます。

また、神様ははいつくしみとまこと、つまり、愛と正義の神様です。

### (2) 不敬虔な者。

次ぎに注目したいのが、「不敬虔な者」です。これは、「敬虔でない者」という意味だけでなく、「神様を信じなかったり、神様に反抗したりする者」という意味でもあります。とんでもない人です。

**適用：**しかし、私たちはどうでしょうか。「敬虔な人」と言えるでしょうか。

私は、小さい頃、進んで、神棚や仏壇にご飯やお水を上げてました。また神社の前を通る時は、必ず立ち止まって頭をさげました。一見敬虔に見えます。しかし、そのような外見とは別に、心では、人を妬み、憎むこともあり、友達に誘われてボクシングの試合を見に行き、入場料を払わず、塀によじ登って忍び込んだこともありました。

すべてをご存じの神様から見れば、敬虔とはほど遠い者でした。

### (3) 義と認めてくださる。

次ぎに注目したいのは、「義と認めてくださる」ということばです。それは、「罪を赦して、受け入れてくださる」ということです。神様は、不敬虔な者の罪を赦し、受け入れてくださるというのです。

神様が不敬虔な者の罪を赦してくださるのは、神様が慈悲深い方だからでしょうか。その通りです。しかし、神様がただ罪を赦すのであれば、神様の正義はどうなるのでしょうか。

**例話：**弁護士は、罪のない人を弁護して、無罪にすることは出来ますが、罪のある人を弁護して無罪にすることは出来ません。もし、そうするのなら、弁護士の正義はどうなるのでしょうか。その弁護士は不義を犯したことになるります。

正義の神様は、罪を罰しなければなりません。でも、その通りの罰したら、私たちは罪を犯しているのですから、罰せられて滅びるほかはないのです。そこで神様は、人の罪を罰して、罪を赦すという手品のようなことを行ってくださいました。それが、イエス・キリストの十字架なのです。イエス様は、罪のない神様の御子でした。神様は、罪のない御子に私たちの罪を負わせて、罰したのです。イエス様は、私たちの身代わりとなって死んでくださったのです。

**例話：**中国の大地震で、四川省綿竹市の幼稚園で、背中にセメント板を受けて倒れながら、抱えた園児の命を守った先生がいたそうです。園児は無事救い出されましたが、先生は息絶えていました。

イエス様は、私たちを罪から救うために、ご自分のいのちを犠牲になされたのです。

## 2 信じるなら、その信仰が義とみなされる。

神様は、不敬虔な者を赦し、受け入れてくださいます。では、私たちはどうすればよいのでしょうか。それは、ただ信じればよいのです。その信仰が神によって義とされ、受け入れられるのです。

### (1) 信じるなら。

「信じるなら」ということばに注目しましょう。これは、「何の働きもない」に対応することばです。神様に何の良いこともできない、し

ていなくても、信じるならよいというのです。

ここで大切なのは、「何を信じるか」です。

日本人の信仰の特徴は、「信じる心」が大切で、「何を信じるか」をあまり問わないのです。真言宗の信者も、浄土真宗の信者も、弘法大師や親鸞の教えを詳しく知っているわけではありません。神社にしても何が祭ってあるかをしりません。金比羅さんにしても同じでしょう。

何を祭ってあるかよりも、それを拝んで御利益があればよいのです。

しかし、聖書の信仰は「何を信じるか」が大切です。ここでは、何を信じるのでしょうか。

「不敬虔な者を義とする方」を信じるのです。ですから、信仰は聞くことから始まります。聞いたことのないことを信じることはできません。知識のない信仰は、盲信や狂信になってしまいます。

ここは、「不敬虔な者を義とする方」を信じるのです。そのために、イエス様が私たちの罪のために十字架で死に、三日目に復活して、私たちの生きた救い主であることを聞く必要があります。

## (2) その信仰が義と認められる。

行いではないのです。私たちは、神様の要求されることを完全に行うことは出来ません。ですから善い行いによって、神様に受け入れられることはないのです。

神様に受け入れられる唯一の道は、神様を信じることであるというのが、聖書の一貫した教えです。

## (3) 神の恵みによる救い。

私たちが救われるのは、ただただ神様の恵みなのです。神様が、私たちを選び、神様の子にしようと決めてくださったのです。そして、私たちの罪のためにイエス様を身代わりとし、私たちの罪を赦してくださるのです。そして、信じる者には、聖霊をお与えにになり、罪をきよめ、キリストと同じ姿に変えてくださるのです。

## 結論

以上「不敬虔な者を義と認めてくださいる神様」を見て来ました。ここから言えることは、どのような人も救われるということです。不敬虔な者が救われるのです。

**適用:** これまでの日本の仏教の中で、これに近い教えに至った方がいます。真言宗を開いた空海、弘法大師は、大日如来への信仰を教えました。浄

土宗、浄土真宗を開いた法然、親鸞です。南無阿弥陀仏への絶対信仰を教えました。日蓮は、法華経への絶対信仰を教え、南無妙法蓮華経を唱えさせました。

問題は、大日如来とは、阿弥陀仏とは、法華経とはということですか。本当に信頼していいのか。

仏教が日本に伝わる500年も前に、使徒パウロは、「不敬虔な者を義とする神」「イエス・キリスト」を信じるように教えた。どちらが、あなたにとって身近で、信じることのできる方でしょうか。

**例話:** 私にとってこのみことばは、決して忘れることの出来ないものです。私の信仰に確信を与えたみことばです。私は1953年にイエス様を救い主として受け入れる決心をしました。しかし、なかなか自分がクリスチャンになったという確信が持てませんでした。そのような時、自分で聖書を読んでいて、このみことばにぶつかったのです。どんなに不敬虔であってもいいのだ。このような者を神様は愛して、義と認め、受け入れてくださるのだと分かったのです。その嬉しかったことは、それこそ、天にも昇る気持ちでした。その時から今日まで、自分の救いを疑ったことはありません。不敬虔な者を義と認めてくださる神様を信じるからです。

聖書が私たちに求めているのは、

- 1 神様がおられて、求める者には必ず応えてくださると信じること。
- 2 自分が神様に罪を犯していることを認めること。
- 3 イエス様が私たちの罪の身代わりとなって十字架にかかり死んでくださったこと、そして復活して、生きた救い主として私を迎えてくださることを信じること。
- 4 イエス様を信じるだけで、自分の罪が赦され、神様の子どもとして受け入れられることを信じること。

## 招きのことば

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(Iヨハネ 4:10)

「見よ。わたしは戸のそとにたって叩く。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録 3:20)

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」(使徒 16:31)